

る方法を研究す。
 ○(オム)―ハリエス (Prof. chal. Harries (キール大學教授)はオムの大研究をなし、推定成分を指示し之を簡單なる式に表はし且つオムの眞否を化學的に推定することを出せり。
 ○加奈太政府は「ハーチル」氏を委員とし製鐵製鋼の電氣加熱による鑛石の還元並に還元せられたる鐵の精製を研究せしむ(一九〇四年報告あり、磷、硫黃等の不純物除去に、硅素、滿俺、タンクステン、モリブデン、ニッケル、バナヂウムを添加するに より特に優良なる鋼鐵を得)

授となる、九十六―
 七年頃ウラニウム於
 射線、マクセル線の
 発見をなし、ノーベ
 ル賞金を得たり、氏
 の放射線に對する學
 説は不充分なりしと
 雖以後放射線研究を
 して盛大ならしむる
 先驅者たり、著書に
 電氣化學、磷光の研
 究等あり。

一九〇四

○ローレンツ氏(及ブツヘル氏 A. H. Bec) グリウム Grinum
 Herer) は再び電子の質量に關する説を公にす 氏硫化亜鉛螢光板に
 (アマラハム氏は既に電子質量に關し理論をつき研究す。
 提出しカウフマン氏此れを實驗によりて確め
 たる後再びローレンツ氏の説あり)

○ラムゼー William
 Ramsay
 (一八五二―)
 英國の化學者にして
 八十七年倫敦大學の
 化學教授なり、九十
 四年ローレンツ氏と共

○英人セラ、クーパー、
 コーレス Shepard Cowper 氏寫眞電送を考案
 Coler 氏亞鉛引の方法とす。
 して粒狀亞鉛を用ふるセ
 ラーダイデンタ法 Shera

に「アルゴン」を發見
 し、九十五年「ヘリウ
 ム」を發見し文、クリ
 ブトンを「ネオン」
 「クセーン」を發見す
 且「ラチウムエマナ
 ナオン」の發見有名
 なり。

rdizing method を發見す
 ○トツタンハウプト
 Todtenhaupt 氏は「カセ
 イン」より人造絹糸を製
 ず。

一九〇五

○アイ因斯坦 A. Einstein 氏相對律 Principle of Relativity の研究をなす(此れより以前マイケルソン(一八八一)及ヒモーレ(一八八七) デブートル(一八八九) レーヴィ(一九〇二) プレース(一九〇四) 等はエーテルと地球との速度關係を知る爲め種々の實驗を試みたり、然れども皆地球とエーテルとの間に相對速度なしとの結果を得たりしが、
 ローレンツ H. A. Lorentz (一八九五) 氏によりて有名な
 物体收縮説提出されたり、此の説は物体其の運動する方面に於て運動の速度と一定の關係を有する長さだけ收縮すること
 を決定し地球は静止せる「エーテル」中を運行する結果となれり、此の説はアイ因斯坦(一九〇五)の相對律によりて確めらる。氏は二つの假定即ち(1)相對性の假定(相を發明す。互に一樣に直線的に移動せる凡ての標系の同等なることを

○醫學者は泉の醫藥とし
 ての效果はコロイド狀にある「ブラウン」運動によるものならんと唱ふ。
 ○パーソンズ及ショルト
 Hon C. A. Parsons and
 Mr. Horace Schort 氏蓄
 音機發聲擴大裝置オータ
 セトフォン Autophone

○ハルステット
 George Bruce Halsted
 (一八五三―)
 米國現代の數學者なり。
 ○エールリツ博士
 (一八五三―一九一
 五)
 獨逸の醫學博士にして
 化學療法の研究
 をなし、血精療法及

要求すること (2) 光速度の不変の假定 (標系の各に於て光の傳播は空間内の凡ての方向に相等しき速度をもて進むこと) を提出せり。

○グイスコニス絹糸—マツタスミコレル氏はグイスコニス溶液を沈澱せしむるに濃硫酸重硫酸曹達水を用ふる特許を得、シー、エ、エルンスト氏は米國に於て硫酸アムモニウム及重硫酸曹達を固化法に用ふる特許を得。

○獨人シェーハア Schou Herr 氏空中窒素を利用して硝酸を製す。

○佛人サーベツク氏アルミニウムより「窒化アルミニウム」を製造する方法を發明す。

○獨人シェーハア Schou Herr 印刷電信につき發表す。

○ワイケル Weigel 氏は「セレニウム」の光に感するは其体内に含まるゝ水が光をうけて抵抗を減するものとせり。

○獨人サーベツク氏アルミニウムより「窒化アルミニウム」を製造する方法を發明す。

○米國ライト兄弟 Wilbur and orville 飛行機にて飛翔す。

び「サルバルサン」即ち六百六號 (一九〇一年) 新サルバルサン (一九一二年) を發見す。

○オストワルド Wilhelm Ostwald (一八五三—)

獨逸の大化學者にして、七十二年トルバト大學に學び七十五年同大學助手となり八十年結婚す、八十一年、リガより教授に招聘せられ、八十七年ライプツヒ大學に榮轉し、一九〇一年自然哲學年鑑を刊行す、全年、接解作

用の研究あり、分析化學、溶液論、無機化學の著あり。

一九〇六

○ユラコアアリウ (酸性染料) エルゼツセル氏發見す。

○パーキン氏コイル染料 料發見五十年祭典あり。

○カウフマン氏精密なる装置により電子質量に關する實驗をなす、○寫眞電送シヤルボネー氏法の發明特許あり。

○テルンスト氏熱力學「テルンストの定理」を發表す。

○無線電信—丁抹ブルセン氏はダツタル氏の電弧を水素瓦斯中に入れ尙磁石にて之を吹くときは任意の周波數を得らるゝことを發見す又石炭瓦斯中に電流を通して行ひ新成功を見たれども完成せず、

○獨逸マツクスウイン氏「ダニピンク」甚だ小にして單一周期を有する持續振動電流の發生を發見す、○フレンジグ氏熱電檢波器發明す、○佐伯美津留氏鐵粉檢波器發明す。

○コロイト溶液—スヴェーデンバーク氏はコロイド溶液中の粒子の運動は解離せる運動論と全く同じ法則に支配さるゝことを明し、翌年「セヤツヒ」は温度の上昇と共にプラウ運動が旺盛になることを証明す。

○緯度共同觀測の爲め カテイボ (アルヘンチナ) に觀測所を設けZ項 (木全大學の講師となる) の研究の後八十二年一八八五年滿輪の運動論を提出して學者の賞賛を得、トケンブリッヂ大學の「アダムス」獎學金を得

<p>一九〇七 ○サーベク Beripke 氏赤熱せる炭化アルミニウムに窒素を通し窒化アルミニウムを製す</p>	<p>○無線電話—米國フェルスセニデン氏は一九〇三年頃より高周交流發電機の實驗に着手し一九〇七年蒸氣タービンを以て二、五キロワット、二二五ワット七万五千サイクルの交流を起しブランドルツク無線電信所と紐育間約二百哩を二五ボルトの電力をもて通話し得たり。</p>	<p>○巴里に於てオーギユス及びリコシエー氏着色寫眞を考案す。</p>	<p>翌年皇立學士院の會員に選ばれ又ケンブリッヂ大學の「カペンヤツシ」物理教授に擧げらる。一八九〇年力學及熱力學の原理を電氣及化學に應用したる著書をなし、又「マックスウエル」の電氣磁氣論の續編を公にし真空放電論の研究を明にし、X線の発見せらるゝや熱心に之の研究をなし電磁論によりて説明し得べきことを示せり、九十四年ケンブリッヂ科學會長に擧げられ、九</p>
<p>○アウエル、フオン、ウエルス、ハット、Auer von Welsbach 氏電燈纖維を改良す。</p>	<p>○ナイヤガラ瀑布に於て電氣アルカリ工業タウゼント氏法設計さる(障壁を有する電池にて陰極液に「クロシン」を加へ陰極に生したる曹達を電池より濾過分離す)</p>	<p>○アルトメルク Althberg 氏電氣の振動放電の際に非常に高き聞えざる音波が周圍の空氣に生することを注意す。○デ、フオレスト式米國無線電信會社に使用せらる、○ベルント Berndt (一九〇四) 及マルク Marc (一九〇七) 氏はセレンウムの光に感ずる原因につき論</p>	<p>し結晶性セレンウムは不導體なる Se_A と導體なる Se_B とよりなり光をあてるも熱すると同じ結果にて Se_B を生して導性になると説明せり。</p>

<p>一九〇八 ○アムモニア合成—「ハーバ</p>	<p>○佛人ベラン M. Belin 氏セレンウムを利用せざる寫眞電送を發明し之を「テレス、テレノグラフィ」Telsteleograp によりてアムモニアを得。○サ、Hie と名く、○遞信省技師鳥瀧一ベツク氏は礬土と石炭とを右一氏鐵石(タンタラム)檢波酸化炭素を生ずる割合に混し器を作る、○パウルセン氏無線電話成る(水素瓦斯)一九〇〇器飛行す。</p>	<p>○飛行器—ツエツペリン伯航行氣球の爲めランゲノアルヒ殿下會長となり百万弗を寄附す。</p>	<p>○英人ファルマンの飛行</p>	<p>十六年英國理學會部長に擧げられ又歐米の諸大學より名譽博士の學位を得、一九〇三年「瓦斯體を通過して電氣の傳導」の著あり、又陰極線の研究は物質と電氣との關係及放射作用の現象に關する新研究の端緒を開きたり</p>
<p>○アムモニア合成—「ハーバ」Haber 氏は高温度に於て窒素と水素を化合せしめ、急速を發明し之を「テレス、テレノグラフィ」Telsteleograp によりてアムモニアを得。○サ、Hie と名く、○遞信省技師鳥瀧一ベツク氏は礬土と石炭とを右一氏鐵石(タンタラム)檢波酸化炭素を生ずる割合に混し器を作る、○パウルセン氏無線電話成る(水素瓦斯)一九〇〇器飛行す。</p>	<p>○キヨリー Pierre Curie (一八五七—一九〇六)</p>	<p>佛國の物理學及化學者にして「ソルボンヌ」大學に學びて博士となり、一八九五年結婚し、一八九八年</p>	<p>佛國の物理學及化學者にして「ソルボンヌ」大學に學びて博士となり、一八九五年結婚し、一八九八年</p>	

<p>○ハーロッド氏はグイスコー ル絹糸製造に、表面にオレイ ン酸の薄層を浮遊せる稀硫酸 を固化に使用せり。</p> <p>○ランデック St. Lindeck 氏 は比抵抗と温度係数と比重と の三つの相乗積が一定値なる とを見出す。金属の比抵抗は 温度によりて變化し其關係係 は實驗的に $Wt = Wo(1 + At)$ 中の「イオン」の流れに歸する W は零度の比抵抗、A は温度 係数なり J. H. Dellinger は種々の銅棒につきて實測せ り。</p> <p>○クラウデ G. Claude 氏「チ オン」管の光につき研究す。 ○電氣アルカリ工業ホイツチ ング氏法發見す(此法は「カス ナイト」の水銀陰極電池を改 (英)は水銀蒸氣燈を實驗す。</p>	<p>○シュレーヤンゲル E. Schur 氏 は濕氣ある空氣中 に於て絶縁体の傳導度を測定 す。</p> <p>○プランケ理論物理學八講を 著す。</p> <p>○マウエル L. A. Bauer 氏は 磁氣嵐地球磁氣の原因は大氣 中の「イオン」の流れに歸する ものとす。</p> <p>○ザクス St. Zachs 氏は紫外 線の作用を檢し、紫外線の作 用によりて塵なき空氣中に荷 電体の存在するを認む。</p>	<p>○瑞西人「シェー」氏噴 霧鍍金法を發明す。</p> <p>レクホーン及びボロ クナ大學に學び、幼 時より電氣學を好み ヘルツ、プランク 等の實驗を聞き無線 電信の成功すべきを 信し實驗に着手し、 遂に通信用の無線電 信を完成せり。</p> <p>氏は一八九六年五月 英國に赴き成功せん とせしに税關吏の爲 めに性まれ一切の機 械を破壊されたり、 電氣學者ウイリアム ブリス氏は氏の倫 教に入るに及び實驗 上の便宜を與へ又知 名の學者及資本家に</p>
---	--	--

<p>長したるものにして陰極に分 離せる曹達アマルガムを攝取 し水を以て處理し曹達を分つ ものにして水銀は再び電池に 送り戻す、現今「メイン」の「ル ムホート」瀑布に設置する、 ○バッキンガム E. Backin gham 氏完全氣體の定義を與 ふ。</p>	<p>○アインシュタイン Einstein 氏は光の速度は重力の「ボ テンシアル」に關係あるを述べ、又、ミー G. Mie 氏 も相對律につき述べ。</p> <p>○高周波振動放電に關し、カンペン A. Campbell 氏 I. D. W. Dye 氏は電波の波長を「クント Kundt の方法」によりて測定し、音波の波長は之を生ずる電 氣振動の二倍に等しき結果を得たり之れ電氣振動の各 週期間に於て二つの光花の現はれて、空氣波動を起す による。</p>	<p>紹介して其援助を與 へたり、遂に資本家 は一八九七年十萬磅 の資本金をもて無線 電信會社を組織せり 之より漸次實用に應 用する。</p> <p>○エミール、フィシ ヤ Emil Fischer 獨逸現代の化學教授 にしてロザニリンの 構造確定、フェニル ヒドラチンの發明、 カフェイン、テオプロ</p>
---	--	--

<p>一九二一 ○ラムゼー W. Ramsay 及グ レイ R. W. Gray 両氏は「ラ チウム、エマナチオン」の原子 量を測定し二百二十三とす。</p> <p>○サーベタ氏は礬土と石灰と を電氣爐にて高温度に熱し窒 化アルミニウムを得る特許を 得。</p>	<p>○アインシュタイン Einstein 氏は光の速度は重力の「ボ テンシアル」に關係あるを述べ、又、ミー G. Mie 氏 も相對律につき述べ。</p> <p>○高周波振動放電に關し、カンペン A. Campbell 氏 I. D. W. Dye 氏は電波の波長を「クント Kundt の方法」によりて測定し、音波の波長は之を生ずる電 氣振動の二倍に等しき結果を得たり之れ電氣振動の各 週期間に於て二つの光花の現はれて、空氣波動を起す による。</p> <p>○エミール、フィシ ヤ Emil Fischer 獨逸現代の化學教授 にしてロザニリンの 構造確定、フェニル ヒドラチンの發明、 カフェイン、テオプロ</p>
---	---

○Z項(木村項)發見者理學博士木村榮氏に對し學士院は恩賜賞授與式を擧ぐ。

○コンネル E. O. Conner 氏はブルセン Poulsen の弧燈につき振動輪道を入れて振動せしめたる場合、又入れざる場合の「スペクトル」を比較し、振動せざる弧燈に於ては銅の輝線、炭素の帶及水素の輝線を見られたるも振動せる場合は銅の線は殆ど消去せるを認む。

○磁氣嵐及極光につきて次の説明あり。

(1)ステールマー O. Störmer 氏は太陽のコロナを説明し、太陽より放射する陰電氣粒子の流れなりとし此の粒子は太陽の磁場の影況をうけて一定の法則によりて動くものとす(一九〇八年ボルケランの説明と全様)

(2)ヴェカント Vegund 氏は北極光はA線又はB線よりなるものとせり (3)シュスター A. Shuster 氏は太陽より來る電氣的粒子が大氣上層を電離し地球に感應を起す(一九一〇年バイエル氏と同様) (4)バイエル氏は又地球の永久磁石が地球外部の陰電子の流れにより變化すとせり (5)ビドリマンマイエル Er. Bidlingmaier 氏はバイエルと反對に地球内部に於ける鐵層の磁性が温度の變化により地磁氣の年週變化を説明せり。

○セレニウムにつきて、リース chr. Ries 氏は Berndt

ミン、キサンゲンの研究あり。
一八八二年エルランゲンに於て尿酸屬の研究、一八八五年ウエルツアルヒに轉し一八九二年伯林大學に轉す。

○エングレン Adolph Engler 獨逸近代の植物學者にしてアイヒテル氏と共に新式分類を著述す。

	<p>○コンネル E. O. Conner 氏はブルセン Poulsen の弧燈につき振動輪道を入れて振動せしめたる場合、又入れざる場合の「スペクトル」を比較し、振動せざる弧燈に於ては銅の輝線、炭素の帶及水素の輝線を見られたるも振動せる場合は銅の線は殆ど消去せるを認む。</p> <p>○磁氣嵐及極光につきて次の説明あり。</p> <p>(1)ステールマー O. Störmer 氏は太陽のコロナを説明し、太陽より放射する陰電氣粒子の流れなりとし此の粒子は太陽の磁場の影況をうけて一定の法則によりて動くものとす(一九〇八年ボルケランの説明と全様)</p> <p>(2)ヴェカント Vegund 氏は北極光はA線又はB線よりなるものとせり (3)シュスター A. Shuster 氏は太陽より來る電氣的粒子が大氣上層を電離し地球に感應を起す(一九一〇年バイエル氏と同様) (4)バイエル氏は又地球の永久磁石が地球外部の陰電子の流れにより變化すとせり (5)ビドリマンマイエル Er. Bidlingmaier 氏はバイエルと反對に地球内部に於ける鐵層の磁性が温度の變化により地磁氣の年週變化を説明せり。</p> <p>○セレニウムにつきて、リース chr. Ries 氏は Berndt</p>	<p>ミン、キサンゲンの研究あり。 一八八二年エルランゲンに於て尿酸屬の研究、一八八五年ウエルツアルヒに轉し一八九二年伯林大學に轉す。</p> <p>○エングレン Adolph Engler 獨逸近代の植物學者にしてアイヒテル氏と共に新式分類を著述す。</p>
--	--	--

Maro (一九〇七年)の化學説に反し又 Krust (一九〇九)の膨脹説を批難して、セレニウムの原子内にある電子は各個有の振動をなし此れに相當する振動の光波により共鳴して振動し自由電子を生じ、此の自由電子が抵抗を減するものとせり。

○トムソン J. J. Thomson 氏はカナル線につき研究し三種の線を含むことを結論し、寫真板に感せしめ、分析術に應用しヘリウムの存在を指示せり。

○米國に於て高聲電話器考案 ○アラン、イー、シー、

○米人アルモン、ビー、ストロヴォヨートルトン氏無辯瓦斯

電話交換器市俄古市に採用す

○ラウエ Laue 氏 X線は反射せず屈折せざる非常に短波長の光線なることを証明し後、誤なること判然す。

○キョリー夫人 Mme Curie (1867—生存)

佛國化學者にしてキョリー氏の夫人なりラチウムの發見及其研究あり。

<p>一九二二 大正元年</p>	<p>○元素ニトン、萬國原子量表に入る。</p> <p>○エールリツヒ博士、新サルバルサン(九百十四號)を發明す。</p> <p>○ツツカー及ヤング両氏(コロンビア大學)はストロンチウムの炭化物を作り窒素の作用につき研究す。</p>	<p>○米國に於て高聲電話器考案 ○アラン、イー、シー、</p> <p>○米人アルモン、ビー、ストロヴォヨートルトン氏無辯瓦斯</p> <p>電話交換器市俄古市に採用す</p> <p>○ラウエ Laue 氏 X線は反射せず屈折せざる非常に短波長の光線なることを証明し後、誤なること判然す。</p>	<p>○キョリー夫人 Mme Curie (1867—生存)</p> <p>佛國化學者にしてキョリー氏の夫人なりラチウムの發見及其研究あり。</p>
----------------------	--	--	--

<p>一九一三</p>	<p>○メルサイウス氏水蒸氣を鐵に作用せしめて多量の水素を得。 $3Fe + 4H_2O = 4H_2 + Fe_3O_4$ (Bergius Process)</p>	<p>○ブラック氏は、クルックス管の對陰極板として、パラウム或はロヤウムを用ひ、X線の全一なる波長のものなることを論ず。 ○フィリップ C. E. S. Phillips ラウム發動機を作る。 ○ヘンリー、クルークス氏エマナチオンの殺菌力を檢す。 ○鳥瀆横山北村、三氏無線電話を東京、横濱、神戸間に試験し通話確實なるも呼出完成せず。</p>	<p>○伊太利ギド、グッヰイ氏F光線發見の報ありといふ。 ○アインシュタイン氏一九〇五年相對論の第二の假定を捨て重力の理論を包括せる新しき相對論を公にす。</p>
-------------	---	---	--

<p>一九一四</p>	<p>○フォルムアルデヒドを木精空氣の混合溶液を、觸媒を用組織す。 ひて製す(米國特許) ○アセチレンより醋酸を製する特許あり(佛) ○ウオルフ及ミユラー氏 Johannes wolf & Erich Mueller 新しき電氣爐を製す。 ○ヨハン、キルヘルム、ヒツトルフ(ミュンスター大學名譽教授) 逝去す。</p>	<p>○我國にて化學工業調査會を組織す。</p>	<p>○ウイン大學ルードウキツトアプター氏 Ludwig Buchta 光線熱線素外線の酵母發芽作用に及ぼす影況を研究す。</p>
<p>一九一五</p>	<p>○一九一四年よりの歐州大戰争によりて獨逸の發見發明につきては不明なり。各國戰亂の影況により工業上 化學上に於て獨立自營を計るに至りしは、學術界の一大革新覺醒なるべし。特に藥劑製法染料製法に於て著し、一面科學應用は武器改良に集中し、飛行器、飛行船、潛航艇、毒瓦斯、毒瓦斯防禦法、砲、銃、等の進歩に就きは著しきものあり、獨逸に於ては化學者は武器製造補充、食料缺乏の爲め食品の化學的製法の研究に従事し、獨著名なる學者の戰國線に立てるものあり、我國に於ては工</p>		

- 業獎勵、理化研究所設立の計畫等あり、特に六百六號の如き藥劑製法完成す。
- 大阪衛生試験所にて「ニガリ」より臭素を製出する法を研究す。
- W. T. Bowie氏シモン線(紫外線に屬し、波長の短きもの)の破壊的作用及原形質に及ぼす影響を研究す。
- 大正四年六月染料醫藥品製造獎勵法發布せらる。
- 東洋藥品株式會社設立其他數十の製藥染料會社設立す。
- エールリッヒ博士逝去す。
- 鳥濱氏伊勢灣に於て無線電話を試験し各局波長を異にするも通話に際し整調するときは混話なきに至る。
- 米國ロバート、ウアルバートン氏無線電信に空中線なき新設備をなしたり。
- 米國電信電話會社無線電話を改良し、華府附邊アーリントン無線電信所と桑港附邊メア軍港(二千五百哩)及布哇眞珠灣(四千九百哩)との通話に成功す。
- 米人ラッセル氏無線電波によりて操縦する空雷(飛行器より飛行器を射撃す)を發明す。
- 米國海軍少將フイスク氏飛行器より軍艦を射撃する空雷を發明す。
- 米國アラスカ北極圏に於て大規模の風車により北極風を利用し電氣を起し光及び

熱に利用する計畫あり。

- 米國ハーヴアード大學教授フォン、ダヴィット氏電氣の變化を應用して性能判斷機を作る。
- 佛國グットン氏はフッフ氏の誘導平衡器を應用して、地下埋没の不發彈偵知方法を研究し、埋没彈感知機を完成す。
- 木村駿吉理學博士工業的オゾン發生機を發明す。
- 飛行船と飛行機の比較研究、潛航艇に對する汽船の防禦裝置の研究あり。
- 飛行器襲來聴取機、汽船衝突豫防霧中號角聴取機(紐育電信技師エリアス、リース氏)潛航艇偵知機(米人キリアム、ヤエヒリアー氏)等の發明あり。
- 其他我國に於ては從來經濟上より創業し得ざりし化學工業電氣工業は勃然として起り、電氣亞鉛工業、硫酸アムモニウム製造、護謨工業製藥、肥料、製鋼、硫化染料、等の製造會社起る。

一九一六
大正五年

- 歐洲戰亂の影況の爲め米國に於けるコイルタル工業隆盛となり、同時に染料の製出多し。
- 我國アルカリ工業勃興す、○我國に製藥工業發達す。
- 臨時産業調査局成る。

○我國、工業製薬に關する會社の設立は、歐州戰亂以來、四百以上に及び、多大の資本を投し益々發展の氣運を示せり、且探礦、冶金につきても見るべきもの少なからず、醫學者間に於ける病菌研究の爭論、化學者間に於ける專問的研究は、屢報導せらるれども省略せん。

○歐州戰亂に於ける、英、佛、露、米等の學者の發見發明、特に獨逸に於ける、開戰以來の發見、即ち工業に關し、武器に關し、食料化學、及毒瓦斯に關し、歐州の戰亂中に於ける發見、發明の報導せらるゝ時を鶴首して待たん哉。

結尾

本書は緒言に於て述べたる如く物理化學並に一般科學の發達概要を具體的に會得し、科學思想發達研究の資料たらしめ、以て先哲の勳勞を回想し、國民教育の資料たらしむるものなり、故に專問的研究及特許登錄事項に至りては全く省略せり、然のみならず此等は其數頗る多く其局にあるものにあらずれば能はざる所にして、此處に列記するは、本書の目的に非らざるなり。

明治十八年特許法發布以後の特許登錄に關しては、化學工業發明辭書あり、又二十世紀の科學につきては

Discoveries and Inventions twentieth Century — E. Cressy (London 1915)

Chemker Kalender — Biederman

等あり、尙、本書起稿に關し、發見發明年數の、著書によりて、一致せざるものあり、此れ等に關しては、主として

Lippincott's Pronouncing Biographical Dictionary

により訂正せり、また、科學者年表略傳は該書に依る所多し、尙本書起稿に際して參考せるもの二三を擧ぐれば次の如し。

科學思想發達史、工業大辭書、百科大辭書、哲學大辭典、理科辭典、發明界の進歩、驚くべき世紀、化學沿革史、理學界、科學世界、東洋學藝雜誌、其他の雜誌。

History of Physics — 1915 P. Cajori.

History of chemistry, Thorpe.

The Romance of Science Discoveries Gibson (全譯學術的發見史)

其他、物理、化學、歴史、地理に關する書籍。

大正六年八月

城山南麓に櫻島を仰きて、著者識す。

大正六年八月十八日印刷
大正六年八月二十五日發行

歷史資料發見發明年表

(定價金六拾錢)

內地郵稅六錢



著者

岡田良一

發行者

鹿兒島市中町百二十四番地
吉田幸兵衛

印刷者

鹿兒島市山下町一八八番地
田代運平

印刷所

鹿兒島市山下町一八八番地
嘉定社

電話一三〇二番
掛替口座福岡七五四五番

發行所
發賣所

鹿兒島市中町百二十四番地

吉田書房

振替貯金口座福岡一〇六七番

365
48

終

